

夏どりイチゴの栽培法

阿 部 隆・吉池 貞蔵*

(岩手県園芸試験場南部分場・*岩手県園芸試験場)

Method of Cultivation on Strawberry for Summer Crop

Takashi ABE and Teizo YOSHIKAKE*

(Southern Branch, Iwate Horticultural Experiment Station・*Iwate Horticultural Experiment Station)

1 は し が き

露地イチゴの収穫が終る6月下旬以降は、一部高冷地帯や株冷蔵栽培のものが出荷される程度で、全国にも品不足の時期である。この時期のイチゴは生食用より業務用として需要が高いため、果実は日持がすぐれ、大きさも10g前後と比較的小さいものが望まれている。

本県の西和賀地域は融雪が遅れることにともない、6月下旬から7月中旬収穫とかなり遅出しができるが、栽培的には全般に低収で、特に収穫後期の品質、収量の低下が問題となっている。これら課題解決のため、昭和55年から3か年にわたり現地試験を実施したので、その結果について報告する。なお、本試験は岩手県園芸試験場本場で担当したものである。

2 試 験 方 法

(1) 植付苗の大きさ (昭和55年収穫)

植付時期を9月11日に設定し、苗の大きさを大苗、中苗、小苗区の3段階に分けて検討した。植付時の苗の大きさは株重でそれぞれ27.2g、14.0g、5.2gであり、大苗は親株から発生した1番苗、中苗、小苗は更にこれから発生した2番苗、3番苗を使用した。

(2) 植付時期 (昭和55・56年収穫)

植付時期を9月1日(55年の植付月日は9月3日)、9月11日(同10日)それに慣行の9月21日植え(同20日)で検討した。54年の植付時の苗の大きさは株重でそれぞれ12.2g、14.0g、14.4gであったが、56年は未調査である。

(3) 秋トンネル効果 (昭和56・57年収穫)

昭和56年は被覆期間を10月1日～11月10日の短期被覆と、10月1日～12月4日の長期被覆とを設定し、被覆期間と品質、収量の関係について検討した。

また57年は苗の大きさを1番ランナー苗の大苗区と2番ランナーの中苗区で、苗の大きさと被覆効果の関係について検討した。被覆方法は夜間ポリフィルムにシルバーポリトウの併用で保温を図り、日中15℃前後で換気した。

56年の被覆期間試験の植付時期は9月10日としたが、57年は大苗区が9月8日、中苗区は9月14日に植付けた。また苗の大きさは葉数でそれぞれ3.8葉、2.8葉であった。

なおいずれの試験においても品種は盛岡16号を使用した。

3 試験結果及び考察

夏どりイチゴは融雪が遅い気象条件を利用した作型であ

るため、特に越冬前の苗の良否が品質、収量に大きく影響を及ぼすものと考えられたため、まず植付苗の大きさについて検討した。その結果、a 当り収量は大苗区が183.3kgで最も高く、中苗、小苗区よりそれぞれ15%、23%程度まされた。時期別収量でも大苗区の後期収量は明らかに高く7月の収量比が中苗区の119%、小苗区の127%であった。

苗の大小と果重との関係では、平均重でほとんど差は認められなかったが、大苗区で10g以下の小果がやや多い傾向がみられた。

次に植付時期の早晩が品質、収量に及ぼす影響について検討した。収量は植付時期が早い9月1日植区(55年は9月3日)が最もまされ、慣行の9月20日定植に比較し54年124%、55年111%の収量比であった。

この増収効果は特に後期収量で高く、54年植えの7月は慣行区比で148%の収量比を示し、55年も7月中下旬の収量比が122%とまされた。

果重は大苗区同様、早植区で10g以下の小果が多かったが、これは収穫後期ほど果実の肥大が低下し小果が多いため、これら処理区の後期収量が高いことを示している。

一方この地帯は花芽分化が行われる秋の期間が短く着果数が少ないことが低収の大きな原因の一つとなっている。この花芽分化期間の延長と花芽の充実を図ることを主なねらいとした秋トンネルの効果について検討した。

トンネルの被覆期間と収量の関係では12月4日の根雪始めまで被覆した長期被覆区のa 当り収量が143kgで最も高く、収量比で短期被覆区の128%、無処理区の147%と顕著に処理効果が認められた。

引き続いて57年は植付苗の大小と秋トンネル効果について検討したが、トンネル被覆により大苗区が133%、中苗区が150%の収量比で、苗の大小にかかわらず秋トンネル効果の大きいことを示した。苗の大きさと関係では特に中苗区でその効果が顕著であった。時期別収量でも秋トンネル区の後期収量が著しく高く、56年の7月中下旬の収量が27%、57年の7月の後期収量で40%前後無処理区を上回った。

秋トンネルと果実の大きさとの関係では、需要の高い10g程度の果実は明らかに秋トンネル区が多かったが、後期収量が高いことに伴い、平均重は無処理区よりやや劣る傾向がみられた。

表 1 植付苗の大きさと収量

(株当り)

苗の大小	A 個 数 重 量 (kg)		B 個 数 重 量 (kg)		合 計 個 数 重 量 (kg)		1 個 平均重 (g)	くず果 数	病果数	a 当り 収 量 (kg)	収量比
大 苗 区	1,401	13.0	195	3.5	1,596	16.5	10.3	160	138	183.3	115
中 苗 区	1,296	11.7	158	2.7	1,454	14.4	9.9	123	153	160.0	100
小 苗 区	1,139	10.1	196	3.3	1,335	13.4	10.0	110	138	148.9	93

注. A: 良果, B: 形状劣るが販売可

表 2 植付時期と収量

(40 株当り)

植 付 時 期		A 個 数 重 量 (kg)		B 個 数 重 量 (kg)		合 計 個 数 重 量 (kg)		1 個 平均重 (g)	くず果 数	病果数	a 当り 収 量 (kg)	収量比
55年	9月1日	1,457	12.5	251	4.0	1,708	16.5	9.7	290	145	183	124
	9月11日	1,296	11.7	158	2.7	1,454	14.4	9.9	123	153	160	109
	9月21日	1,137	10.5	151	2.7	1,288	13.2	10.2	60	148	147	100
56年	9月3日	874	7.7	146	3.0	1,020	10.7	10.5	60	37	119	112
	9月10日	676	6.4	105	2.4	781	8.8	11.3	45	67	98	92
	9月20日	709	7.4	84	2.1	793	9.5	12.0	24	31	106	100

表 3 トンネル被覆期間と収量

(40 株当り)

被覆期間	A 個 数 重 量 (kg)		B 個 数 重 量 (kg)		合 計 個 数 重 量 (kg)		1 個 平均重 (g)	くず果 数	病果数	a 当り 収 量 (kg)	収量比
短期被覆	752	7.8	106	2.3	858	10.1	11.8	47	53	112	115
長期被覆	959	9.4	182	3.5	1,141	12.9	11.3	76	64	143	147
無 処 理	676	6.4	105	2.3	781	8.7	11.1	45	67	97	100

表 4 苗の大きさと被覆効果

(80 株当り)

試 験 区		A 個 数 重 量 (kg)		B 個 数 重 量 (kg)		合 計 個 数 重 量 (kg)		1 個 平均重 (g)	くず果 数	病果数	a 当り 収 量 (kg)	収量比
大苗	被 覆	2,186	20.2	349	6.7	2,535	26.9	10.6	30	47	149	137
	無 被 覆	1,397	13.8	311	6.4	1,708	20.2	11.8	17	50	112	103
中苗	被 覆	2,353	20.5	420	9.1	2,773	29.6	10.7	41	66	164	150
	無 被 覆	1,363	14.5	314	5.2	1,677	19.7	11.7	13	40	109	100

表 5 被覆期間と時期別収量 (56 年)

(40 株当り)

被覆期間	半旬別	7 月				
		1	2	3	4	5
短期被覆		0.1 kg (—)	1.3 kg (325)	4.3 kg (113)	1.6 kg (94)	0.6 kg (120)
長期被覆		0.2 (—)	1.6 (400)	3.8 (100)	2.7 (159)	1.1 (220)
無 処 理		0 (—)	0.4	3.8	1.7	0.5

注. () 内は時期別収量比 (対無処理比)

表 6 苗の大きさ, 被覆の有無と時期別収量 (57 年)

(80 株当り)

試験区	半旬別	6 月		7 月			
		5	6	1	2	3	4
被 覆	大 苗	2.2 kg (147)	2.2 kg (88)	5.4 kg (90)	7.6 kg (141)	5.3 kg (204)	4.3 kg (226)
	中 苗	3.4 (227)	1.8 (72)	6.3 (105)	8.3 (154)	5.2 (200)	4.1 (216)
無処理	大 苗	0.9 (60)	2.4 (96)	5.3 (88)	6.1 (113)	3.3 (127)	2.2 (116)
	中 苗	1.5	2.5	6.0	5.4	2.6	1.9

4 ま と め

融雪が遅い気象条件を利用した夏どりイチゴの生産安定を図るため, 55年から3か年にわたって現地試験を実施した。この結果, 夏どりイチゴは冬期間長く雪の下に置かれ, しかも果実が比較的小果の需要が高いことから, 従来の露

地イチゴに比較し大苗を早植し, 越冬前に株の充実を図る効果が大きかった。

更にこの地帯は秋の花芽分化期間も短いことから, 花芽の確保と花芽の充実をねらいとした秋トンネルの効果が顕著に認められ, しかもこれにより後期収量が著しく向上することが判明した。